

研究ノート

早期体験演習における看護学生の老年看護に関する学び

Learning concerning the student nurse's old age nursing in experience maneuvers at early stage

古市清美¹⁾, 高橋ゆかり¹⁾, 鹿村眞理子²⁾, 兎澤恵子³⁾

Kiyomi Furuichi, Yukari Takahashi, Mariko Shikamura, Keiko Tozawa

要旨

早期体験演習における老年看護に関する看護学生の学びを明らかにする目的で、看護専門学校1年次に開講された必修科目「老年看護学概論」の講義における高齢者疑似体験演習に参加し、観察者役となった46名の課題レポートを分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 【自立を促す援助】【安全面の配慮】【尊重する態度】の3カテゴリが形成された。
2. 【自立を促す援助】は、〈生活しやすい環境づくり〉〈障害物の除去〉〈見守る姿勢〉〈個性の把握〉〈衣服の工夫〉の5項目で成り立っており、最も記録単位総数が多かった。
3. 【安全面の配慮】は、〈危険を予測した援助〉〈社会資源の活用〉〈内服薬の確認〉〈高齢者のペースに合わせた援助〉の4項目で成り立っていた。
4. 【尊重する態度】は、〈高齢者に合わせたコミュニケーション方法〉〈十分な説明〉〈自尊心への配慮〉〈高齢者の気持ちに添う姿勢〉の4項目で成り立っていた。
5. 抽出された3カテゴリは、「高齢者のための国連5原則」の「自立independenceの原則」「ケアcareの原則」「尊厳dignityの原則」と一致していた。

キーワード：早期体験演習 (Experience maneuvers at early stage)、学び (Learning)、看護学生 (Student nurse)、老年看護 (Old age nursing)、高齢者疑似体験 (Senior citizen virtual experience)

1. はじめに

わが国では、人口の高齢化により急速な高齢社会とともに、世帯構成状況の変化もおきている。国民生活基礎調査の報告 (2008) によると、65歳以上の者のいる世帯構成割合では、単独世帯、夫婦のみの世帯が年々増加している半面、三世帯世帯が急激に減少している。このことから、従来はごく自然に地域や家族の中で行われてきた多世代の交流する機会が当たり前の状況ではなくなり、老年期と他の世代が交流する機会が珍しい光景となってきた。そのため、現代社会における青年期の学生世代は、高齢者との同居経験や、高齢者との触れ合い接する機会が減少していることから、高齢者の身体的・社会的・

精神的特徴や具体的な生活場面を理解して対応することが困難な状況であると考えられる。

中島ら (2009) は「高齢者を援助する行為の場で大切なことは、いま生きている時代に共通する社会的期待として、老年期の自立能力の強化に向けられている。そのため、高齢者を対象とする老年看護は、可能な限り非援助であることのほうが高齢者の自立支援として好ましいかたちである。」と述べている。また、高田ら (1998) は、「看護職者は、高齢者の動作を見守るゆとりがもてず、自分でできそうな高齢者に対して、援助だと勘違いして手をさしのべてしまう傾向がある。看護職者が手をさしのべすぎることにより、高齢者の残された諸々の機能や自立する

1) 上武大学看護学部看護学科、2) 和歌山県立医科大学保健看護学部、3) 杏林大学保健学部看護学科

気持ちまで低下させてしまう可能性がある。」と指摘している。このことから、看護職を目指す看護学生が、高齢者の身体的・社会的・精神的特徴や具体的な生活場面をイメージできないことが原因で、高齢者の自立を妨げる援助を行ってしまう危険があるのではないかと考えた。そのため、看護学教育では、看護学生が高齢者の特徴を肯定的な面からも理解し、高齢者に必要な適切な援助を具体的にイメージできるように教授することが必要であると考えた。

高齢者疑似体験演習における看護学生の学びに関する先行研究では、相羽ら（2003）の看護大学3年生を対象とした高齢者のイメージと高齢者理解の変化や、室屋ら（2004）の看護大学3年生を対象とした老年看護学における対象理解と援助者の役割、藤原ら（2002）の看護学生を対象とした高齢者理解などの報告がなされている。また、成人看護学援助論の学内演習による周手術期の対象理解と周手術期に必要な看護の教育効果に関して山本ら（2009）は、学内演習を導入したことにより、リアリティのある周手術期にある患者や周手術期の看護を具体的にイメージできる機会となり、有効な教授方法であったことを報告している。

そこで本研究では、高齢者疑似体験演習の早期導入における看護学生の老年看護に焦点を当てた学びを明らかにしたので報告する。

II. 研究目的

看護学生を対象とした高齢者疑似体験演習の早期導入における老年看護に関する学びの内容を明らかにすることを目的とした。

III. 研究方法

1. 対象

看護専門学校1年次生で高齢者疑似体験演習に参加し、研究の趣旨に同意を得られた学生82名を調査対象とし、そのうち、観察者役となった46名の学生の課題レポートを分析対象とした。

2. 研究期間：平成21年10月～平成22年12月

3. 分析方法

分析対象となった学生の課題レポートに記述されている内容を詳細に判読した。分析には、老年看護に関する学びに関して表明された内容を客観的、体

系的かつ数量的に記述するための調査方法である Berelson, Bの内容分析の手法（1954）を参考にして行った。そして、学生の記述内容から、高齢者疑似体験演習に参加しての「学び」の傾向を明らかにした。

分析の手順は、記述内容の出現を算出するための最小単位として、句点から句点までの1文章を記録単位、また個々の課題レポートを1文脈単位とした。その際、1記録単位中に「学び」の記述が複数含まれるものに関しては、意味のあるまとまりをもって記録単位とした。また、記録単位は大小に関わらず全てを分析の対象とした。

次に、これらを精読して、学生が高齢者疑似体験演習に参加して得た老年看護に関する学びの記述を抽出した。記録単位は全てデータとし、意味の内容が捉えにくい記述については前後の文脈から解釈した。そして、個々の記録単位を内容の類似性により、帰納的に分類・抽象化、カテゴリ化し、出現頻度を算出した。集計には、Microsoft Excelを使用した。

本研究の信頼性は、記述内容の検証およびデータ分析の全プロセスにおいて、共同研究者間の検討を繰り返し行うことにより確保した。

4. 高齢者疑似体験演習の概要

1) 演習の位置づけと目的

老年看護学概論の導入部分としての位置づけで演習を行った。演習を通して高齢者の心身の特徴を理解し、看護者としてのあり方を考えることを目的とした。

2) 高齢者疑似体験演習の方法

(1) 役割：高齢者役1名、介助者役3名、観察者役3～4名合計6～7名を1組とした。

①高齢者役：SAKAMOTO MODELのお年寄り体験スーツを装着し、課題とした項目を体験した。

②介助者役：高齢者役の安全面に配慮し介助を行った。

③観察者役：高齢者役、介助者役の行動・動作の様子を観察した。

(2) 体験時間：1組30分程度とした。

(3) 体験項目：表1を参照。

3) 課題レポート

各役割に対し、高齢者疑似体験演習終了後、演習における学びを600～1000字で自由記述し提出するよう指示した。

表1 高齢者疑似体験項目

書字	レポート用紙の氏名の欄に、学籍番号と氏名を記入
移動	床からの起き上がり、ベッド昇降、歩行、階段昇降
排泄	洋式トイレにて、トイレットペーパーを使用する(体験スーツの上から)。
食事	はし、スプーンの使用
更衣	ボタン、ファスナーのかけはずし
服薬	チョコレートシートから取り出し、口に運ぶ
その他	自動販売機の使用

5. 倫理的配慮

学生には、研究の目的・意義ならびに、研究参加は自由意志であること、研究に参加せずとも成績には一切影響がないこと、研究目的以外にはデータを使用しないことやプライバシーへの配慮を文書および口頭で説明し同意を得た。また、本研究は上武大学研究倫理委員会の審査を経て行ったものである。

6. 用語の操作的定義

老年看護：老年看護とは、老年期にある人々を対象とし、その人の健康を維持・回復・増進を目指し、その人らしく生活できるように、人間としての尊厳を保ちながら援助することである。

IV. 結果

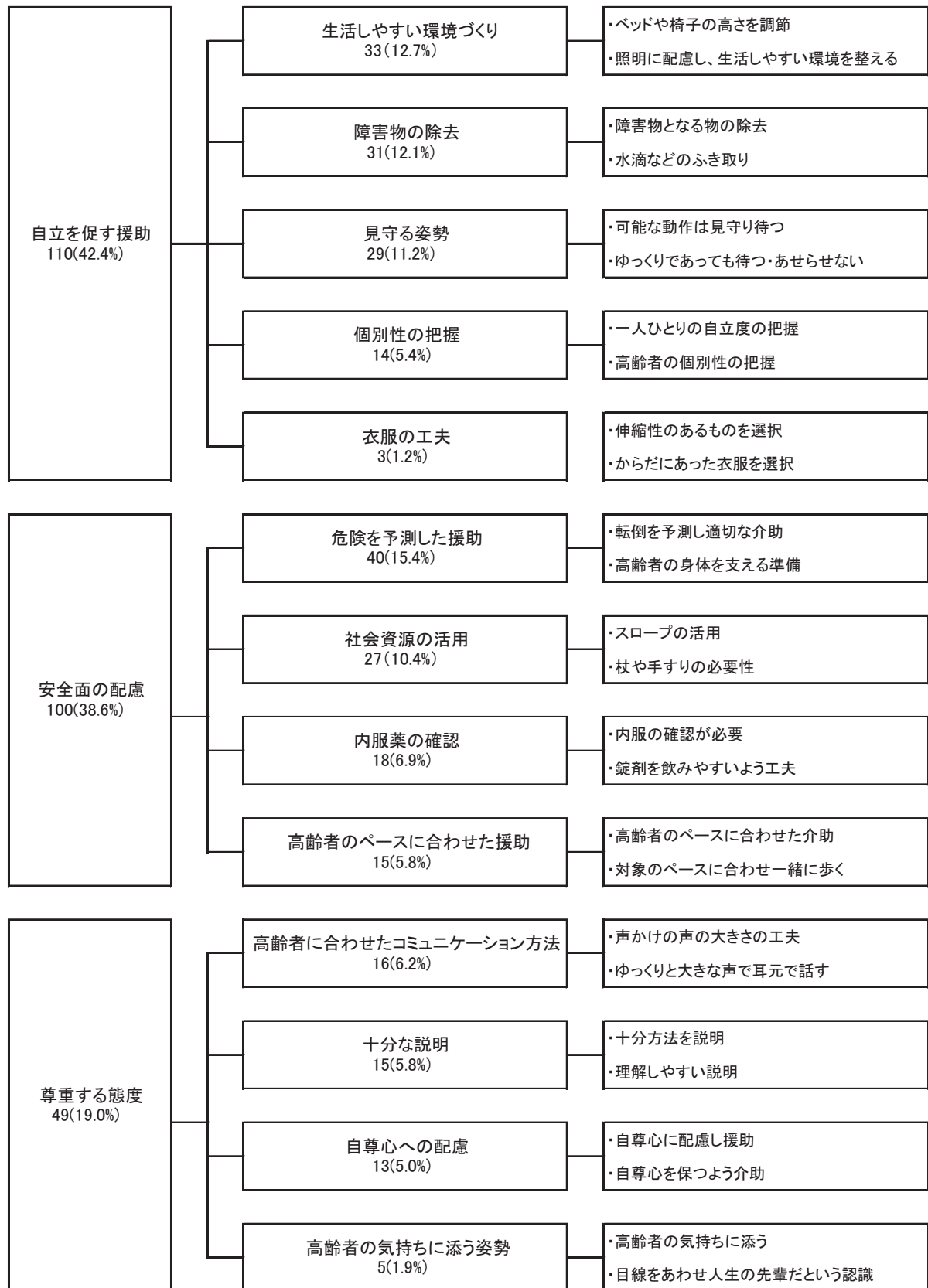
観察者役46名の課題レポートを分析した結果、老年看護に関する学びの記述259記録単位を抽出した。そのデータから、3カテゴリ、13サブカテゴリを形成した。カテゴリとカテゴリを構成するサブカテゴリは図1の通りであった。

以下に【 】カテゴリ、〈 〉サブカテゴリと示す。

【自立を促す援助】のカテゴリは110記録単位から構成され、記録単位総数の42.4%に該当し、最も記録単位総数が多かった。カテゴリを構成するサブカテゴリは、〈生活しやすい環境づくり〉〈障害物の除去〉〈見守る姿勢〉〈個別性の把握〉〈衣服の工夫〉の5項目で成り立っていた。具体的には、「高齢者が生活しやすいように物品の配置の工夫や補助具を利用することが必要であると感じた。」「高齢者は関節可動域が狭く、床からの立ち上がりなど1つ1つの動作に時間がかかり困難であったため、つかまるところ

等の工夫が必要である。」「書字の際には、部屋の照明を明るくし、書くスペースを広く取るなどの環境の配慮が必要であると感じた。」「危険因子はどこにでも潜んでおり、環境整備は事故防止へつながる第一歩であると実感した。」「安心して安全に高齢者が移動できるように環境調整として床に障害物を置かない。」「床がぬれていないか確認し、障害物となる物の除去など環境整備を行う。」「高齢者ができることは自分でしてもらい、できない一部を介助し、できるだけ見守ることが大切だと思った。」「介助者は高齢者を見守ることも必要であり、あまりうるさく接せず、集中できる環境を提供する。」「介助者は、高齢者の個々の身体機能レベルを知っておくことが大切になる。」「高齢者が着脱時に楽のように伸縮性のあるものや丈夫な物を選ぶようにすると良いと思う。」といった記述内容から生成されていた。

【安全面の配慮】のカテゴリは100記録単位から構成され、記録単位総数の38.6%に該当した。カテゴリを構成するサブカテゴリは、〈危険を予測した援助〉〈社会資源の活用〉〈内服薬の確認〉〈高齢者のペースに合わせた援助〉の4項目で成り立っていた。具体的には、「高齢者の援助の際には、しっかりと観察し、危険予測ができることが大切である。」「援助者は、歩行時に後ろから腰を支えるように介助し、高齢者がバランスを崩しても支えられる位置で介助する。」「その人に合った杖、長さ、重さ、すべりにくさを選ぶことは安全面で大切だと感じた。」「階段や廊下にはスロープがついているほうが段差がなくて良い。」「シートからの取出しがうまくいかない場合、気持ちがいらいだちシートのまま飲み込んでしまったり薬の誤飲がおきたりする可能性があるため、援助者は確認する必要がある。」「介助者は、薬の種類や数を把握し、口に運び飲み込んでいるか確認することが必



数字は記述数、()内は%を示す。

図1 老年看護に関する学びの分析結果

要だと感じた。」「介助するさいにも高齢者の行動を考慮して、相手のペースに合わせた介助で行うことが大切と感じた。」「高齢者の横に立ち、歩行状態を確認しながら高齢者のペースに合わせて歩行する必要がある。」といった記述内容から生成されていた。

【尊重する態度】のカテゴリは49記録単位から構成され、記録単位総数の19.0%に該当した。カテゴリを構成するサブカテゴリは、〈高齢者に合わせたコミュニケーション方法〉〈十分な説明〉〈自尊心への配慮〉〈高齢者の気持ちに添う姿勢〉の4項目で成り立っていた。具体的には、「難聴であるため、声をかける際にはゆっくりと大きな声で、耳元で話すことでわかりやすいと感じた。」「介助者は、高齢者が話し終わったことを確認して、ゆっくり低い声で声をかける必要があると感じた。」「介助者が周囲の状況をゆっくりと説明することで安心感が得られることがわかった。」「介助者は高齢者が理解できる言葉を使用し、困惑させないよう心がける必要がある。」「高齢者の介助の場合は、自尊心を傷つけないよう配慮することが大切である。」「介助者は高齢者ができるところを把握し、自尊心を保つよう介助する必要がある。」「高齢者の気持ちにそうすることが大切である。」「会話をする際にも声かけするときも高齢者と視線をあわせ人生の先輩だという認識が必要である。」といった記述内容から生成されていた。

V. 考察

高齢者疑似体験演習における、老年看護に関する看護学生の学びを分析した結果、【自立を促す援助】【安全面の配慮】【尊重する態度】の3カテゴリから形成されることが明らかとなった。

中島ら(2009)は、「老年看護とは、老人ゆえのリスク(老化と複合する病気像、不完全な回復、またそれらと闘い、自立した生活を営むには不足した潜在力と時間)をもった人々を対象とし、その個々にふさわしい援助をすることである。ふさわしい援助とは、その老人の生命と日常生活活動にとって必要なこと、生命と生活を維持し、目ざしうる望ましい態様を獲得していく看護活動である。」と述べている。また、国際連合(以下、国連と略す)は、1991年に世界的に進行している高齢化を見据えて、高齢者の人権を保障するための目的で「高齢者のための国連5原則」を採択した。この内容は、高齢者の「自立independenceの原則」「参加participationの原則」

「ケアcareの原則」「自己実現self-fulfillmentの原則」「尊厳dignityの原則」の5つの基本原理と18の原則を示している。(表2)

たとえば、「自立independenceの原則」の項目では、高齢者の衣・食・住生活についての基本的権利が確認されている。そして、「参加participationの原則」の項目では、高齢者が社会の一員として、高齢者に関する政策の決定に積極的に参加することが確認されており、老年看護では、高齢者の生命と生活を維持し、高齢者を主体にして考え、高齢者が可能な限り自立して生活ができるよう関わるのが大切である。そこで、本稿では、看護学生の老年看護に関する学びの内容を、国連の「高齢者のための国連5原則」に焦点をあて考察していく。

【自立を促す援助】のカテゴリは、高齢者が見やすい色を生活空間に取り入れ工夫すること、高齢者に合わせた椅子の高さの調節や、ベッド柵を設けることにより起き上がりやすくするなど高齢者が自立して生活するための環境整備に関した「生活しやすい環境づくり」のサブカテゴリで構成されていた。また、足元に置いてある物・水滴や配線コードなどを片付けて高齢者が安心して安全な自立した生活をおくることができるための環境整備に関する「障害物の除去」のサブカテゴリで構成されていた。そして、高齢者に合った衣服を工夫するなど具体的な日常における衣・食・住生活場面での配慮に関した「衣服の工夫」のサブカテゴリも構成されていた。さらに、高齢者一人ひとりの個性を把握し援助する必要性や、高齢者にとって必要以上の援助は高齢者の自立を妨げてしまうため見守り待つという援助者の姿勢に関した「見守りの姿勢」と「個性の把握」のサブカテゴリも構成されていた。これらは、「高齢者のための国連5原則」(表2)における「自立independenceの原則」の「収入や家族・共同体の支援および自助努力を通じて十分な食料・水・住居・衣服・医療へのアクセスを得るべきである。」と「安全な環境に住むことができるべきである。」と一致していると考えられる。

松本ら(2001)は、看護職を対象とした高齢者の自立に関する研究報告で「高齢者の自立の援助には、高齢者の日常生活や能力を尊重し、加齢にあった身体的・社会的・精神的支援が必要であり、健康や生活を整えていくQOLに着目した支援が必要である。」と述べている。さらに、「看護職者が、高齢者

表2 高齢者のための国連5原則

「自立independenceの原則」

- ・収入や家族・共同体の支援および自助努力を通じて十分な食料・水・住居・衣服・医療へのアクセスを得るべきである。
- ・仕事、あるいは他の収入手段を得る機会を有するべきである。
- ・退職時期の決定への参加が可能であるべきである。
- ・適切な教育や職業訓練に参加する機会が与えられるべきである。
- ・安全な環境に住むことができるべきである。
- ・可能なかぎり長く自宅に住むことができるべきである。

「参加participationの原則」

- ・社会の一員として、自己に直接影響を及ぼすような政策の決定に積極的に参加し、若年世代と自己の経験と知識を分かち合うべきである。
- ・自己の趣味と能力に合致したボランティアとして共同体へ奉仕する機会を求めることができるべきである。
- ・高齢者の集会や運動を組織することができるべきである。

「ケアcareの原則」

- ・家族および共同体の介護と保護を享受できるべきである。
- ・発病を防止あるいは延期し、肉体・精神の最適な状態でいられるための医療を受ける機会が与えられるべきである。
- ・自主性、保護および介護を発展させるための社会的および法律的サービスへのアクセスを得るべきである。
- ・思いやりがあり、かつ、安全な環境で、保護・リハビリテーション・社会的および精神的刺激を得られる施設を利用することができるべきである。
- ・いかなる場所に住み、あるいはいかなる状態であろうとも、自己の尊厳・信念・要求・プライバシーおよび、自己の介護と生活の質を決定する権利に対する尊重を含む基本的人権や自由を享受することができるべきである。

「自己実現self-fulfillmentの原則」

- ・自己の可能性を発展させる機会を追求できるべきである。
- ・社会の教育的・文化的・精神的・娯楽的資源を利用することができるべきである。

「尊厳dignityの原則」

- ・尊厳および保障をもって、肉体的・精神的虐待から解放された生活を送ることができるべきである。
- ・年齢・生別・人種・民族的背景・障害などにかかわらず公平に扱われ、自己の経済的貢献にかかわらず尊重されるべきである。

の自立をどのように認識しているかが看護実践に影響を及ぼすため、高齢者の心理・精神的自立に目を向けるように働きかけることが必要である。」と指摘している。

本演習を通して、学生は、高齢者が住みなれた自宅ではない入院施設であっても自立して安全に生活できるように環境を整備することなど、高齢者の自立する能力を維持・向上するために高齢者の生活の質に着目した援助が大切であることに気づいていた。また、そのためには高齢者が生活しやすいように環境を整えることや、可能な限り見守る姿勢を持つなど、高齢者の尊厳や生活の質を維持するための援助方法を具体的な視点で学ぶ機会となったことが明らかになった。

【安全面の配慮】のカテゴリは、高齢者は加齢による身体的機能の変化から転倒事故の危険性が日常生活に潜んでいるため、常に転倒を予測し適切な介助が必要であることに関した「危険を予測した援助」と「社会資源の活用」のサブカテゴリで構成されていた。また、介助者と高齢者のタイミングの差から転倒する危険が生じることから援助者の方法に関する「高齢者のペースに合わせた援助」も構成されていた。さらに、嚥下機能や手指の巧緻性の低下など加齢による身体的機能の低下から誤薬の危険を防止する必要性に気づき、服薬時の援助の必要性に関した「内服薬の確認」のサブカテゴリも構成されていた。これらは、「高齢者のための国連5原則」(表2)における「ケアcareの原則」の「いかなる場所に住み、あるいはいかなる状態であろうとも、自己の尊厳・信念・要求・プライバシーおよび自己の介護と生活の質を決定する権利に対する尊重を含む基本的人権や自由を享受することができるべきである。」と「思いやりがあり、かつ、安全な環境で、保護・リハビリテーション・社会的および精神的刺激を得られる施設を利用することができるべきである。」と一致していると考えられる。

学生は、加齢による身体的機能の低下に伴う転倒や転落、誤薬の危険因子が日常生活におけるいろいろな場面に潜んでいることに気づくことができていた。また、老年看護において高齢者の生活をより充実した快適なものとするために社会資源を活用することや、高齢者一人ひとりに合わせ、安全面に配慮する援助の必要性に目を向けることもできていた。

中野ら(2010)は、「高齢者を対象とする臨床実習

では、基本的な看護技術の多くが日常生活援助技術に関するものであり、対象が高齢者であることを念頭にした安全・安楽な援助を提供することである。」と述べている。このことから、今回の学生の学びは、今後の臨床看護学実習において環境を整備することなど具体的な安全面における援助方法を実践するための一助となることが示唆された。

【尊重する態度】のカテゴリは、高齢者の加齢による身体的機能の低下における難聴や視力低下に配慮し、声かけの声の大きさやスピードを調整することや高齢者にわかりやすい言葉を使用し、高齢者が理解できるよう十分に説明することなどコミュニケーションに関した「高齢者に合わせたコミュニケーション方法」と「十分な説明」のカテゴリで構成されていた。また、高齢者の自尊心に配慮した援助者としての姿勢や、高齢者の気持ちに寄り添い人生の先輩であることを認識することなど尊重する姿勢に関する「自尊心への配慮」と「高齢者の気持ちに添う姿勢」のサブカテゴリで構成されていた。これらは、「高齢者のための国連5原則」(表2)における「尊厳dignityの原則」の「尊厳および保障をもって、肉体的・精神的虐待から解放された生活を送ることができるべきである。」と「年齢・性別・人種・民族的背景・障害などにかかわらず公平に扱われ、自己の経済的貢献にかかわらず尊重されるべきである。」と一致していると考えられる。

古村ら(2009)は、「老年看護学においては、高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を理解し、高齢者個々の価値観や生活習慣を踏まえ高齢者の意思決定を尊重し援助することが重要となる。看護学生が高齢者を尊重する姿勢や高齢者への学修し、高齢者と親和的な関係を意識化することにより、臨床実習の際に高齢者との対応が円滑にすすむ。」と述べている。

本演習を通して、学生は、高齢者の加齢による身体的機能の低下に対するコミュニケーション方法の工夫や人生の先輩として関わる姿勢、高齢者の自尊心に配慮し援助することなどを学習し、高齢者と親和的な関係を築くための方法を認識する機会となったことが明らかになった。

VI. 結論

早期体験演習における老年看護に関する看護学生の学びを明らかにする目的で、看護専門学校1年次

に開講された必修科目「老年看護学概論」の講義における高齢者疑似体験演習に参加し、観察者役となった46名の課題レポートを分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 【自立を促す援助】【安全面の配慮】【尊重する態度】の3カテゴリが形成された。
2. 【自立を促す援助】は、〈生活しやすい環境づくり〉〈障害物の除去〉〈見守る姿勢〉〈個性性の把握〉〈衣服の工夫〉の5項目で成り立っており、最も記録単位総数が多かった。
3. 【安全面の配慮】は、〈危険を予測した援助〉〈社会資源の活用〉〈内服薬の確認〉〈高齢者のペースに合わせた援助〉の4項目で成り立っていた。
4. 【尊重する態度】は、〈高齢者に合わせたコミュニケーション方法〉〈十分な説明〉〈自尊心への配慮〉〈高齢者の気持ちに添う姿勢〉の4項目で成り立っていた。
5. 抽出された3カテゴリは、「高齢者のための国連5原則」の「自立independenceの原則」「ケアcareの原則」「尊厳dignityの原則」と一致していた。

謝辞

本研究は、平成21年度第3回、平成22年度第1回上武大学特別研究費助成を受けて実施した研究の一部である。

引用文献

相羽利昭, 山村江美子, 板倉勲子 (2003) : 高齢者疑似体験による高齢者のイメージと高齢者理解の変化, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 11, 119-

126.

Berelson. B ; 稲葉三千男・金圭換訳 (1954) : 内容分析, みすず書房.

藤原智恵子, 森田恵子, 松浦由紀子 (2002) : 高齢者理解に関する学習効果, 神戸市看護大学短期大学紀要, 第21号, 103-114.

厚生統計協会 (2008) : 国民生活基礎調査, 国民衛生の動向, 55 (9), 72-76

古村美津代, 木室知子, 中島洋子 (2009) : 老年看護学教育における模擬患者導入の臨地実習への影響, 老年看護学 Vol.13 No.2, 80-86.

松本啓子, 清田玲子, 池田敏子他4名 (2001) : 看護職の考える高齢者の自立に関する意識調査, 老年看護学 Vol.6 No.1, 107-113.

室屋和子, 佐藤一美, 出口由美他3名 (2004) : 老人看護学における高齢者疑似体験による学び, 産業医科大学雑誌, 26 (3), 391-403.

中野雅子, 伊藤良子, 徳永基与子 (2010) : 看護学生間の演習における看護師役・患者役体験の学びと課題, 京都市立看護短期大学紀要, 第35号, 101-107.

中島紀恵子, 井出訓, 植田恵他11名 (2009) : 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学, p80-86, 医学書院.

高田三千代, 池田敏子, 清田玲子 (1998) : 老人の自立に関する調査, 第29回日本看護学会抄録集 老人看護, 113-115.

山本多賀子, 山田豊子, 三木葉子 (2009) : 成人看護援助論1ー(1)の学内演習における学生の学びと課題, 京都市立看護短期大学紀要, 34号, p109-117.